

言語・非言語コミュニケーションについて ——コミュニケーションの理論化に向けて——

村 越 行 雄

「コミュニケーション」は、現在頻繁に使用されており、私達にとって大変馴染みのある言葉になったと言える。そして、その内容が実に多岐に渡っていることに驚きを感じ、今後どこまで多様化が進むのであろうかと気になってしまうほどである。それは、コミュニケーション研究の重要度と注目度が増加し、研究が発展し、拡大し、多様化した結果、簡単に言えば、研究の進化の結果によるものであろう。そこで、そのような状況を理解するために、簡単な検討を加えていき、それがコミュニケーションの構造的な研究と総合的な解明に基づく理論化への序説になればと思う。

「コミュニケーション」と言っても、一体どのようなものがあるのだろうか。当然の事であるが、何を基準にするかによって、様々な分類が可能となるが、一例を挙げてみよう。例えば、古田暁監修『異文化コミュニケーション』（有斐閣、2001年、pp.32-33）の中では、コミュニケーション・レベルに基づいて分類化がなされ、コミュニケーションが社会レベルと個人レベルに大別され、次に前者が文化、国家、組織、集団のレベルに細分化され、さらにそれぞれのレベルを「間」と「内」に区別して、①異文化（文化間）コミュニケーション、②文化内コミュニケーション、③国際（国家間）コミュニケーション、④国家内コミュニケーション、⑤組織間コミュニケーション、⑥組織内コミュニケーション、⑦集団間コミュニケーション、⑧集団内コミュニケーション、⑨対人（個人間）コミュニケーション、⑩個人内コミュニケーションの10レベルのコミュニケーション類型化の可能性が示されている。ただし、実際には考慮する必要のないものもあり、個人内コミュニケーション、対人コミュニケーション、集団・組織コミュニケーション、国際コミュニケーション、異文化コミュニケーションだけで十分であるとされている。また、鍋島健悦著『異文化間コミュニケーション入門』（丸善、1997年、pp.18-24）の中では、多民族国

家・多人種国家であるアメリカを例にして、異民族間コミュニケーション、異人種間コミュニケーションを区別することが主張されている。これらの二例は、あくまでも数多くある分類化の可能性の一部を示すために利用しただけであって、これだけで全てが済むわけでは勿論ない。

ともかく、上記の二例は、コミュニケーション・レベルを基準にして分類したものであるが、このコミュニケーション・レベルだけに限定して考えてみても、個人、集団、組織、国家、文化、民族、人種だけでなく、それ以外にも、例えば、家族、階層、宗教などのレベルも、コミュニケーションに大きな影響を与える要因になるもので、それらも考慮に入れると、さらに多くのレベルのコミュニケーション類型が可能になってくる。そして、勿論であるが、その他の様々な基準を使用すれば、コミュニケーションの分類は無数に可能であると言えよう。それは、二人以上の、複数の人間が、本人の意志によるかどうかに関係なく、何らかの関わりを持てば、人間関係が成立し、そこに必然的にコミュニケーションが生まれてしまうのであり、複雑に絡み合った関係の中で生きている人間にとって、人間関係そのものがコミュニケーションである以上、複雑な人間関係はそのまま複雑なコミュニケーションを意味することになるからである。

分類の仕方によって、無数とも言える類型化が可能となるコミュニケーションについて、多種多様なコミュニケーションを幾つかの類型に分類することも重要であるが、コミュニケーション全般に適用できるような一般的理論を検討することも重要である。そこで、ここでは後者に焦点を合わせて、検討していくことにする。コミュニケーション一般を対象にするが、テレビ、ラジオ、新聞などのマス・コミュニケーションを直接取り上げることはせずに、それも含めたコミュニケーション全般の基本形（原形）となる、人と人の直接的コミュニケーションを対象として取り上げることにする。

人間同士のコミュニケーションを考える場合、どこまでをコミュニケーションとして捉えるべきかの問題をまず取り上げなければならない。非言語コミュニケーションに関してではあるが、Michael L.Hecht & Joseph A.DeVito & Laura K.Guerrero “Perspectives on Nonverbal Communication Codes, Functions, and Contexts”(Guerrero & DeVito &

Hecht (eds.) *The Nonverbal Communication Reader*, Waveland Press, 1999, p.6) で示されている意見は、参考になるであろう。それは、次のようなものである。

非言語メッセージについて、発信者が発信する意図を持っているかどうか、受信者が注意を向けて、解釈するかどうか、受信者の解釈が正確かどうか、以上の三つの要素による分類が、以下のものとなる。

	受け取られない メッセージ	不正確に受け取ら れるメッセージ	正確に受け取ら れるメッセージ
意図的に送られる メッセージ	未遂のコミュニ ケーション	誤ったコミュニケ ーション	成功したコミュニ ケーション
非意図的に送られ るメッセージ	放置された行動	誤った解釈	偶然のコミュニ ケーション

この表の内、「放置された行動」以外の全てが、コミュニケーションの研究対象になるとされている。つまり、発信者が意図的に発信したわけではなく、しかも受信者がそれに気付かず、そのままにして受信しなかったメッセージは除外されるが、それ以外はたとえどのようなメッセージであっても、全てコミュニケーションの一部を成すものとして研究対象になることになる。

ここで、興味深いのは、研究者の注目がどうしても成功したコミュニケーションの方に向けられてしまい、不成功に終わったコミュニケーションの方にはなかなか向けられない傾向があるが、不成功・失敗などによる誤解や行き違いの解明も、コミュニケーションの理論化にとって、必要不可欠な研究対象であることを明らかにしていることである。そして、上記の表は、言語コミュニケーションについても言えることである。勿論、非言語コミュニケーションの場合、発信者が意図的にメッセージを発信するだけでなく、非意図的に発信することがあるが（例えば、相手の謝罪に対して、口では「気にしていないよ」と言いながら、自分では気付かずに、ちょっとした顔の表情、目の動き、身体の動きなどで、本当は「気にしている」ことを伝えてしまう場合）、言語コミュニケーションの場合は、言語を意識的に使用するわけで、発信者が意図的にメッセージを発信すると考えるのが一般的で

あり、従って上記の表の上段のみに適用できると言えよう。しかし、言語コミュニケーションにおいても、例えば、比喩の場合のように、発信者が意図したメッセージだけでなく、意図しなかったメッセージも伝えてしまうことがあり（例えば、「彼女は、バラだ」と言って、彼女の美しさ、華やかさをバラにたとえて、褒めたつもりが、それを聞いた相手は、バラの刺から、彼女の恐さを連想して、けなしたものと思う場合（あるいは、単なる恐さではなく、美しさ+華やかさ+恐さを連想して、彼女には用心しなさいと受け取ることもあろう））、表の上段だけでなく、下段にも適用できると言えよう。ともかく、コミュニケーション全般（言語的であれ、非言語的であれ）について、上記の表が利用できることは、確かである。

上記の表の内、「成功したコミュニケーション」と「偶然のコミュニケーション」だけが、たとえ偶然であろうと、コミュニケーションが成立したケースであり、それ以外は、成立しなかったケースである。そこで、コミュニケーション全般に関する一般理論を構築するためには、一般理論という性質から見れば、「成功したコミュニケーション」を対象にすることになろうが、とくに非言語コミュニケーションを考慮して、「偶然のコミュニケーション」も対象に入れ、コミュニケーション成立が条件になる。これが一般的な傾向であった。それに対して、コミュニケーション不成立のケースは、例えば、異文化間コミュニケーション、国際コミュニケーションなどの研究で、異文化の人達、外国の人達との間で生じる誤解や行き違いによるコミュニケーション不成立の実例がよく引き合いに出されるように、一般理論の対象（あるいは、主要な対象）としては扱われてこなかったと言っている。言い換えれば、コミュニケーション不成立のケースについて、実例研究は従来実施されてきたし、またコミュニケーションの特定領域との関連で理論化されてきたが、コミュニケーション全般の一般理論の中で、重要な位置を占めるには至っていないのが現状であると言える。

では、コミュニケーション不成立のケースをコミュニケーションの研究対象にすべきであるとしても、事例の個別研究、特殊理論（コミュニケーションの特定領域に関わるもの）、一般理論（コミュニケーション全般に関わるもの）のいずれに組み入れるべきなのであろうか。

さらに、コミュニケーション不成立のケースの内、発信者が意図的に発信したメッセージを、受信者が注意を向けて解釈する「誤ったコミュニケーション」だけを研究対象にすべきなのか、発信者が意図的に、あるいは非意図的に発信したメッセージを、受信者が注意を向けて解釈する「誤ったコミュニケーション」と「誤った解釈」を対象にすべきなのか、さらに拡大して、発信者が意図的に発信したメッセージを、受信者が注意を向けずに、受け取らなかった「未遂のコミュニケーション」までをも対象にすべきなのか、いずれであろうか。また、発信者が非意図的に発信したメッセージを、受信者が注意を向けずに、受け取らなかった「放置された行動」は、本当に研究対象から除外すべきなのであろうか（発信者と受信者以外の第三者がいた場合は、どのような関わりがあるのであろうか）。これらの問題は、コミュニケーションを考える際、避けて通れない、解決すべきものである。

ここでは、簡単に次のことを述べておくことにする。まず最初に、コミュニケーションの研究は、コミュニケーションの成立と不成立の両面の研究によって、十分な成果が得られるものである。それは、日常的な成立と不成立の繰り返しによって、私達の人間同士のコミュニケーションが可能になるのであって、いずれも欠くことのできないものであるからである。次に、その理由から、コミュニケーション不成立のケースを、ただ単に実例の個別研究だけでなく、特殊理論、さらには一般理論の中に、重要で、必要不可欠な要素として組み入れるために、十分に研究しなければならない。最後に、コミュニケーション不成立の「誤ったコミュニケーション」、「誤った解釈」、「未遂のコミュニケーション」の三つのケースは、それぞれがお互いに質的に相異なるものであるが、全て研究対象にすべきものである。その他に、「放置された行動」も、コミュニケーション不成立のケースとして研究対象にすべきであろう。というのは、人間同士のコミュニケーションは、言葉やその他の手段のやりとりによってなされるが、普通に考えれば、単一のやりとりで終わるのではなく、一連のやりとりの連鎖によってなされるのであり、その連鎖はいつも必ずコミュニケーション成立のケースとみなされるやりとりだけから構成されているわけではなく、その中には不成立のケースとみなされるやりとりも含まれるのが現実で、従って、コミュニケーションを一連のやりとりの連鎖と捉

える限り、その連鎖全体から見る必要があり、そのために成立の様々なケースや不成立の様々なケースを研究対象にしていかなければならないからである。

次に、人間同士のコミュニケーションを考える場合に問題になるのが、「言語コミュニケーション (verbal communication)」とか、「非言語コミュニケーション (nonverbal communication)」とか言われているように、「言語の(verbal)」と「非言語の(nonverbal)」の区別で十分なのかということである。勿論、このような言い方は、一般的に行なわれており、それ自体には問題はなく、必要であれば、必要に応じて、その内容を細分化すればいいのだと言えよう。ただ、「言語の」と「非言語の」の区別に対して、「音声の(vocal)」と「非音声の(nonvocal)」の区別の必要性が主張されてきたことは事実であり、それを一方を受け入れて、他方を拒絶するような、取って代る関係として捉えるのではなく、両者を関わりのあるものと考え、それらの組み合わせによる特徴づけの必要性として捉える方がより妥当性がある (Winfried Noth, *Handbook of Semiotics*, Indiana University Press, 1990, pp. 389 - 390) と言え、確かにその方が内容的に理解しやすいであろう。「言語の」と「非言語の」の区別と「音声の」と「非音声の」の区別の組み合わせは、次のようになる。

- 1 : 言語的・音声的コミュニケーション→話し言葉
(verbal-vocal communication)
- 2 : 言語的・非音声的コミュニケーション→書き言葉、手話、代用言語
(verbal-nonvocal communication)
- 3 : 非言語的・音声的コミュニケーション→周辺言語、その他の音声の
(nonverbal-vocal communication) 非言語的使用
- 4 : 非言語的・非音声的コミュニケーション→動作、その他多数
(nonverbal-nonvocal communication)

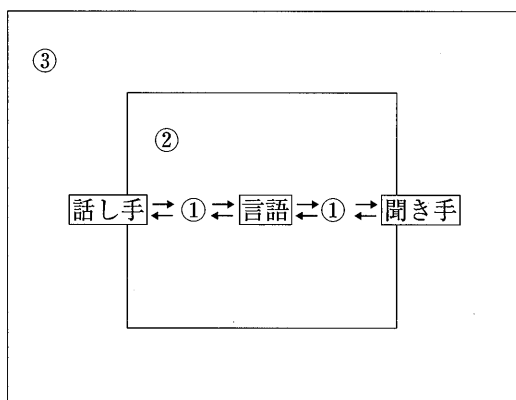
以上の分類を受け入れて考えれば、一般的に言われている「言語コミュニケーション」には1と2が含まれ、「非言語コミュニケーション」には3と4が含まれることになる。しかし、研究者の間では、解釈の相違から取り扱いの食い違いが起きることもある。その一例が次のものである。

3の非言語的・音声的コミュニケーションは、周辺言語 (paralanguage)

と呼ばれるもので、音調学 (vocalics) とも呼ばれている。何を言うかではなく、どのように言うかを対象にする。話し言葉に付随するもので、口から言葉を発する時の、声の高低・強弱、話の速さ、声の質、ピッチ、アクセントなどで、言葉そのものを対象にするわけではないが、言葉から完全に切り離して、周辺言語だけを単独に扱うことはできない。その意味で、1の話し言葉である言語的・音声的コミュニケーションとの関係を見捨てられず、むしろそれとの関係の中で捉える必要があるという主張につながっていくのである。結局、周辺言語を非言語コミュニケーションと言語コミュニケーションのいずれの一部とするのかという問題が生まれてしまう。

もしそうであるならば、筆跡も問題になるであろう。筆跡は、書かれた文字をその言葉から完全に切り離すことができないという意味では、2の言語的・非音声的コミュニケーションになるが、文字の書き方は人によって異なり、必ずしも言葉そのものとは直接関係ないという意味では、4の非言語的・非音声的コミュニケーションに属することになる。例えば、後者の場合、筆跡鑑定のように、書かれた言葉そのものではなく、その書き方を調べることによって、書いた人の性格、性別、年齢などが分かると言われている。ここでも、筆跡を言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションのいずれの一部とするかの問題が生まれてくる。ともかく、話す時の声の出し方と同様に、文字を書く時の書き方は、多くのメッセージを伝えるのであり、時には言葉以上に多くのことを伝えるのであり、その点を明確にするためにも、言葉とは切り離れた形での、声の出し方や文字の書き方の研究が必要であると思われる。

以上、「コミュニケーション」に関わる事柄について、若干の検討をしてきたが、ここではこれ以上立ち入ることは止めて、コミュニケーション研究の状況に話を進めることにする。なお、コミュニケーション全般の基本形（原形）となる、非常に単純な構造を利用して説明することにする。そして、冒頭で触れたように、コミュニケーション研究は発展・拡大・多様化しており、今後ともその方向でさらに進んでいくことになろうが、勿論ここでその状況を網羅的に検討することは不可能であり、従ってあくまでも部分的な検討ということになる。



私達は、日常的に、言語を媒介にしたり、付随したり、その他のやり方で、何らかの形で関わっているものであり、言語と全く関わりを持たないコミュニケーションは可能であっても、日常的に一般的とは言えないであろう。非言語コミュニケーションと言われるものにしても、言語を媒介にしたコミュニケーション（例えば、会話など）に伴う言語以外の手段（例えば、動作など）によるメッセージのやりとりを扱うのであって、言語と何の関わりも持たないわけではないとする主張が強く出されているのである。ただし、言語的メッセージよりも、非言語的メッセージの方が伝達されるメッセージ量に占める割合が非常に大きく、その意味で、非常に重要な役割を果たすと言えるが。そこで、言語的手段を用いたコミュニケーション、簡単に言えば、言語コミュニケーションは、人間同士のコミュニケーションにとって、重要で、しかも中心的な位置を占めていることになる。勿論、伝達される情報量の面から見れば、言語以外の手段を用いたコミュニケーション、簡単に言えば、非言語コミュニケーションの方がより重要であることは、多くの研究者の調査結果によっても明らかである。従って、言語コミュニケーションの重要性・中心性は、量的ではなく、質的なものとして捉えるべきである。

言語コミュニケーションについて、少し中身を見てみると、言語を使用して、あることを伝達する時、使用された言語の字義どおりの意味だけを、それ以上でも、それ以下でも、それ以外でもなく、まさにそれだけを伝達することが目的である場合、そして字義どおりの意味

以上のこと、字義どおりの意味以外のことを伝達することが目的である場合とに大別できる。前者を字義性（字義的意味）に基づく言語コミュニケーション、後者を非字義性（非字義的意味—字義的意味以上のことと字義的意味以外のことは、例えば、含意と比喻を指す）に基づく言語コミュニケーションと呼ぶことができる。そして、左図で言えば、前者が①、後者が②に対応している。

①は、話し手が言語を使用して、聞き手にその字義どおりの意味だけを伝える意図で話し、聞き手がそれを字義どおりに解釈すれば、話し手の意図が直接理解でき、そのことでコミュニケーションが成立することを意味する。①の研究は、言語そのものの研究であって、古代ギリシャ時代からの哲学、論理学から始まり、現在では言語学が中心的役割を果たしている。言語学の中でも、とくに統語論と意味論が重要となる。②は、話し手が言語を使用して、聞き手にその字義どおりの意味ではなく、それ以上のこと、またはそれ以外のことを伝える意図で話し、聞き手がその字義どおりの意味を理解するだけでなく、話の場面から状況判断的に推論して、話し手の意図を間接的に解釈することで、コミュニケーションが成立することを意味する。②の研究は、①が言語それ自体を対象にした、純粋言語的な研究であるのに対して、言語使用に関するもので、言語が実際の場面でいかに使用されるかを対象にするものである。それは、言語哲学や語用論、レトリックや比喩論などである。ただし、言語哲学者や語用論者は、自らの研究対象の一部としてレトリックや比喩論を扱っているので、それらを言語哲学や語用論の一部とみなすこともできるが、一応区別して扱うことにする。というのは、レトリックや比喩論は、言語哲学者や語用論者だけでなく、彼ら以外にも多くの研究者が研究対象にしているからであり、レトリックなどは古代ギリシャ時代から続く長い歴史があり、それだけに言語哲学や語用論に限定できないからであり、また非字義的意味という共通点はあるが、字義的意味以上のこと（含意など）を扱うのが言語哲学や語用論で、字義的意味以外のこと（比喻）を扱うのがレトリックや比喩論であると分けて考える方が、混乱・混同を少なくすることができるのではないと思われるからである。

①と②が言語コミュニケーションということになるが、単純な言い方をすれば、その区別は字義性と非字義性の相違によるものであり、

言い換えれば、言語的意味と言語的意味+コンテキスト(context)の相違によるものであり、②にはコンテキスト依存性という特徴があると言える。なお、ここからは②を中心に話を進めていくことにする。その前に、「語用論」の用語上の問題に簡単に触れておくことにする。最初、哲学者であるモリス、続いてカーナップが記号論を成す三部構成として統語論、意味論、語用論を分類したが、現在では、言語学における研究領域としての統語論、意味論、語用論が広く知られるようになったのであり、それに語用論に属すると言われている研究は、様々な領域に及んでいることもあり、言語学に限定して考えることには無理があるため、ここでは「語用論」という言葉を言語学の一研究領域としてだけでなく、哲学、その他の多くの研究分野を含む、広い意味で使用することにする。

②は、現代の言語研究において、最も注目された研究領域であると言える程、研究が盛んに行なわれ、世界的に高く評価されている理論が数多く生み出され、目覚ましい発展を遂げた領域である。そして、語用論、レトリックなどは、その典型例である。語用論は、哲学の分野において、1950年代から実質的な発展を開始し、1960年代、1970年代へと進むにつれて、研究領域を拡大していき、1970年前後を境にしてかなり短期間の間に、言語学に取り入れられていった。その拡大過程は、指示・前提→言語行為・会話含意・関連性・丁寧さ→会話・談話という具合に示すことも可能であろう。ただし、この配列は、時間的な順序ではなく、それぞれの理論が扱う対象の範囲の広がり程度を示すものである。例えば、語用論は、言語の実際の使用に関する理論であるが、その使用される言語の中身を見れば、次のような区別が可能となる。語句段階における語用論と特徴づけられる指示、前提などに関する理論、文段階における語用論と特徴づけられる言語行為、会話含意、関連性、丁寧さなどに関する理論、そして文の集合体の段階における語用論と特徴づけられる会話、談話などに関する理論という具合に区別できるのであり、もしそうであれば、扱う対象となる言語単位が語と句→文→文の集合体へと拡大したものと捉えることができるのである。そして、厳密には時間的な順序にはなっていないが、研究者の興味がまず最初に最も小さな単位である語と句の段階に向けられ、次により大きな単位である文の段階に向けられ、その後さらに

に大きな単位である文の集合体の段階へと向けられていくと考えるのは自然であろうし、その意味で、上記の配列は、厳密ではないが、時間の流れを示すものとも言えよう。

上記の配列は、今後さらに伸びていく可能性は十分ある。そこで、語用論の研究領域をどこまでにするのかという問題が生まれてくる。この問題は、以前からあるもので、結果的にはいつも拡大傾向になってしまったのである。今後も、さらなる拡大傾向を認めていくのであろうか。ここで言えることは、実際の言語使用の理論化を行なう際、非言語的要素の関わりが重要になってくるということである。上記の配列は、全てコンテキスト依存性という特徴を持っているわけで、従って何らかの形で非言語的要素が関わっていることになるが、問題は非言語的要素として扱える範囲をどこまでにするのかということである。単純な言い方をすれば、指示・前提→言語行為・会話含意・関連性・丁寧さ→会話・談話へと進むにつれて、非言語的要素の範囲が拡大していくことになる。例えば、丁寧さの理論の場合、どのような表現が丁寧かは、性別、年齢、社会的地位などの様々な要素によって影響を受けるわけで、非言語的要素の果たす役割は極めて大きくなる。会話の場合であれば、話す相手が友人であったり、学校の先生であったり、親であったり、子供であったり、医者であったり、会社の上司であったり、店員であったり、タクシーの運転手であったり、様々な人達と様々な状況で話すのであり、非言語的要素の範囲はさらに拡大することになる。つまり、語句→文→文の集合体へと進むにつれて、非言語的要素の範囲が拡大することを示している。それだけでなく、例えば、言語行為の理論よりも、丁寧さの理論の方が非言語的要素の範囲は大きくなるので、同じ段階の中でも、非言語的要素の範囲の拡大は異なってくることになると言える。では、その範囲の拡大をどこまで認めていくのであろうか。その関係でとくに問題になる可能性のあるものは、文の集合体の段階であろう。会話の例にしても、話す相手、話す状況、さらに会話参加者が置かれている社会的、文化的、歴史的状況なども関わってくるのであり、だからこそ会話の研究には、社会学、心理学、文化人類学、民俗学、その他の多くのものが実際に関わってきているのである。しかし、そこまで来ると、果たして語用論に属する研究領域であるとはっきり言えるのであろうか。断定的に言

うことは避けて、さらなる検討を必要とする大きな問題であることだけを言って、次に移ることにする。

レトリックも、語用論と同様に、世界的に注目されている研究領域である。古代ギリシャ時代から始まるレトリックは、最初弁論術として特徴づけられる。弁論術は、発見、配置、修辭、記憶、発表の5部門から構成されていたが、時代の流れの中で、その一部である修辭が代表的な地位を得、修辭学として特徴づけられることになる。その後、一度は舞台から降りたレトリックが、20世紀に入ってから復活するが、修辭学の一部である比喩論として、その中でもとくに隱喩論として特徴づけられるようになる。弁論術→修辭学→比喩論という歴史を背景にして、現代レトリックは、隱喩を含む、比喩全般に関する言語表現の技法・理論を特徴としていると言える。そして、現代の言語研究においてレトリックが占める位置は、比喩表現が日常的に頻繁に使用されており、比喩なしには、日常的な言語使用が十分には理解できない程、重要になっていることから明らかである。また、非字義性の内、字義的意味以上のことは語用論で扱われ、字義的意味以外のことの方はレトリックで扱うとすることで、両者の関係とそれぞれが持つ意義に関して、互いになくってはならない存在になることも明らかである。ともかく、現代の言語研究において、②が注目され、語用論とレトリックの研究領域が量的にも、質的にも、発展・拡大してきたのには、それなりの意味があったと言える。

最後は、③についてである。①と②が言語コミュニケーションであるのに対して、③は非言語コミュニケーションである。非言語コミュニケーションの研究は、最近とくに脚光を浴びている領域で、急速に発展・拡大・多様化してきていると言える。その背景には、研究者の調査結果によって、コミュニケーションの60%以上、ある調査では、90%以上が非言語コミュニケーションであったということが明らかにされたことがある。そして、外見によって人を判断することに対する否定的な態度が、言語以外の、様々な手段によって伝えられるメッセージが持つ意味の重要性を研究する必要があるという積極的な態度に変化したこともある。ともかく、急速に発展したこともあり、扱う対象が多岐に渡っていることもあり、定義にしても、研究領域の分類にしても、扱う対象にしても、必ずしも明確になっているわけではなく、

研究者によってかなりの相違が見られる。例えば、定義については、コミュニケーション＝言語＝非言語コミュニケーションという広義の定義から（動物のコミュニケーション、映像などによるコミュニケーションなどが含まれる）、あくまでも言語コミュニケーションに伴うものを非言語コミュニケーションとする狭義の定義まで、その幅は実に大きいものである。しかし、今後、さらなる研究の発展によって、少しずつ問題が解決され、質的向上が見られることになるであろう。

定義に関しては、一応狭義の定義の方を受け入れることにする。分類に関しては、研究者の間で見られる相違は様々であるが、基本的には、音調学（または、周辺言語）、動作学(kinesics)、接触学(tactile communication, haptics)、近接学(proxemics)、時間学(chronemics)があり、さらに研究者によって呼び方が異なっているが、対物学(objectics)という呼び方を取り入れるとして、6の類型があると言えよう。それに加えて、例えば、動作学の中から、顔の表情や目の動き、対物学の中から、色彩やにおいて取り出して、それぞれ別の区別をするなどして、細分化したり、また対物学の中にある人間の外観（体型、身長、体重などの身体的特徴、衣服、化粧、アクセサリなどの装飾品）と環境（部屋の内装、家具の配置、家のデザイン、色彩など）を二つに分けて、対物学をなくすなどして、組み替えたりして、6以上の類型化ができたりするのである。扱う対象に関しては、まず分類との関係で言えば、対象に何を入れるのか、何を入れないのか、また対象の性質が何かによって、6の基本的な類型を細分化して、より多くの類型にするのか、それとも逆に大別化して、6よりも少ない類型にするのか、これら二つの方向が可能であり、さらに二つを組み合わせることによって、別の可能性も出てくる。そして、対象の選別と対象の性質については、例えば、動作学で扱われる対象に、身体の動き、顔の動き、目の動きの三つ全てを含めたり、前者二つだけや前者一つだけを含めることもできるし、また相手の身体に触れたりする接触行為を扱う接触学と相手とどれくらいの距離を置いて話すかなど、空間の使い方を扱う近接学を共通する性質によって、より大きな類型の中に組み入れることもできるという具合に、何を基準にして対象にしたり、しなかったりするのか、対象が持っている様々な性質の中のどの性質に注目するのか、その他の問題が明らかにされる必要があり、従って事例の個別研究が重要になるが、ここでは以上の簡単な指摘で終え

ることとする。ただ、気になるのは、対物理学と言われるもの（研究者によって呼び方が異なるので、むしろ対物理学やその他の名前で呼ばれているものの中身と言ったほうがいいであろう）である。そこでは、人間が持っている全ての身体的特徴、人間が身につけることのできる全てのもの、人間が所有することのできる全てのものが、対象として扱われることになり、結果的に、そうしたものによる人間判断が、様々な形の偏見や差別を生み出すことになってしまうのである。従って、そのような危険性をも含めた形で研究が必要であると言える。

以上、コミュニケーション研究の状況について、①と②の言語コミュニケーションと③の非言語コミュニケーションの研究領域から、とくに語用論、レトリック、非言語コミュニケーション論（具体的には、音調学、動作学、接触学、近接学、時間学、対物理学）を取り上げて、簡単に検討した。それらを取り上げた理由は、欧米での注目度や重要度が非常に高く、理論的成果や影響力の点でも、高く評価されていることであり、しかもコミュニケーションの構造的な研究にとって必要不可欠な部分を占めることができることである。そして、日本でも、最近ではそのような研究が行なわれ、次第に拡大しつつあるが、さらなる研究の充実へと向かっていかなければならないと考える。コミュニケーション研究にとって、構造的な研究は極めて重要で、①→②→③という三層構造がコミュニケーションの基本形であり、その各層の研究領域に、例えば、統語論・意味論（①）、語用論・レトリック（②）、非言語コミュニケーション論（③）などが入り、空所を埋めることになるのである。そして、結果的に、三層構造全体の総合的な解明へと近づくことになるのである。しかし、それらの研究は、相互に関わりを持つまでには至っていないのが現状で（例えば、統語論と意味論の間とか、語用論とレトリックの間には、相互的な関わりが部分的にはあるが）、それだけに三層構造の各層にそれぞれの研究成果を入れて、空所を埋めることで、各層内と各層間の相互の関わりを明らかにし、さらに三層全ての全体的なまとまりの解明へと近づくようにしていかなければならない。

今述べたことが実現しても、それだけで三層構造の各層の空所全てが埋められ、構造全体に空所が完全になくなるわけではない。というのは、①→②→③は、非言語的要素の範囲の拡大過程を意味するもの

でもあり、その範囲が拡大すればするほど、語用論、レトリック、非言語コミュニケーション論だけでは空所を全て埋めることができなくなり、それら以外の、多種多様な研究の成果が必要になってくるからである。しかし、空所を完全に埋め尽くすことなど、不可能でなくても、非常に困難であり、理想的すぎるという考え方もできよう。それはともかくとして、三層構造の各層に、多方面で得られる研究成果をできるかぎり多く入れて、構造全体のより正確な解明へと向かうように努力していくことは必要であろう。

最後に、本稿では、コミュニケーションの構造的な研究と総合的な解明に基づく理論化へ向けて、その方向性を示すために、部分的で、簡単な検討を行ってきたにすぎず、従って検討の必要がありながら、検討せずに残してきたものが多くあることを記して、終えることにする。